

世間解

第三五九号

平成三十年 一月

発行 西法寺

念仏もうさるべし

— 阿弥陀さまと共に生きる名前 —

新しい年を迎えました。平成三十年。みなさま方には「本願のおはたらきの中お念仏ご相続のことと思います。縁の中では何がやってくるか分からない日暮らしてありますが、本年も何卒よろしくお願い申しあげます。

われわれの浄土真宗の宗祖（一宗・一山をお開きくださったということ、一開山ともいいます）は親鸞聖人です。承安三年（一一七三）にお生まれくださって弘長二年（一二六三）にご往生になられました。

「開山は親鸞聖人というお名前を通っておりますし、その通りなのですが、実は親鸞聖人いくたびかお名前を変えておられます。

梯實圓和上は「親鸞聖人は何か大きな精神的転換があった時に今までの名前を変えられるということとをされる方であったようですね」とおっしゃっていました。今回はそんな親鸞聖人のお名前の歴史をお聞かせいただきこうと思います。

親鸞聖人の幼名はハッキリとは分かっておりません。後に色々な伝記で幼名が語られますが、確証はありません。一開山は九歳で出家をなさいます。お程度の師匠は後に天台座主をつとめられる慈円僧正であったといわれています。

親鸞聖人の曾孫にあたる、本願寺第三代・覚如上人がお書きくださった『御伝鈔』（親鸞聖人の伝記）には「鬢髪を剃除したまひき。範宴少納言公と号す。〜とあって出家された時のお名前は「範宴」であったことが分かります。

二十九歳で法然聖人のお弟子になられた時、法然聖人から名前をいただくわけが「綽空」というお名前です。

三十三歳、法然聖人から主著である『選択本願念仏集』（『選択集』）の伝授を受けられた時、「自身からお師匠さまの法然聖人をお願いをされて名を改められます。

師匠からいただいた名前を変えたいというのですから、よほどのことであつたと思えます。法然聖人もそれをお許しになるわけですから、弟子・綽空の気持ちがよくお分かりであつたのでしよう。「善信」という名前に変わられます。そして時期は分かりませんが、おそらく天親菩薩・曇鸞大師のお書物によって阿弥陀さまのご本願のおはたらき、本願力回向のおいわれを確認された時からご自身で「親鸞」と名乗られるようになり、『選択集』をいただく時の「善信」という名を房号（通称）として用いられます。

ですから親鸞聖人の正式のお名前は「善信房親鸞聖人」と申しあげるのであります。ざつとまとめますと、親鸞聖人のお名前は、

「範宴」——ご出家〜二十九歳まで。

「綽空」——法然聖人のお弟子になられてから。

「善信」——三十三歳で『選択集』の伝授を受けられてから（後に房号とされる）

「親鸞」——天親菩薩・曇鸞大師から一字ずついただくから。

このように親鸞聖人のお名前の変遷はそのまま仏道の確認の変遷でもあつたのであります。《阿弥陀さまのご本願のおはたらきの中に生かされ生ききってゆく》というご自身の「いのち」の意味と方向がより明るく確認されるたびに「一開山はお名前を変えて新しい真の自分と向きあわれたのでしよう。

ご自身では「釋親鸞とおっしゃいます。一開山の「ご法名」です。阿弥陀さまと共に生きる仏道を歩む上での名前です。坊守が以前に『月刊こなつちゃん』に「帰敬式」（本願寺で「ご法名をいただく入門式」のことを書いてくれました。それをお読みくださって「帰敬式」を受けたいがどないしたらよろしいか」と何人かのお同行さまからお尋ねをいただきました。

西法寺では毎年、聖跡参拝と称してバスツアーを行っていますが、今年六月十七日に本願寺で一緒に「ご法名をいただきますか」という形にいたしました。この機会にご縁の皆さまには親御さまからいただくかされた願いのこもったお名前（ご本名）と共にご自身で「阿弥陀さまの願いの中に生きさせていだいてる」ことを確認する（ご法名）をお受けになられませんか。合掌

世間解

第三十号

平成三十年 二月

発行 西法寺

念仏もうさるべし

― 阿弥陀さまと共に生きる名 ―

二月になりました。久しぶりに寒い冬を感じる年明けからの一ヶ月でありましたがみなさま方には阿弥陀さまの暖かいまなざしの中お念仏ご相続のことと思います。平成七年一月十七日の阪神淡路大震災から二十三年の月日が重なりました。

その後、東北や熊本の大震災、各地での災害が起きる中、年々全国ニュースでは取り上げられることが少なくなる中でおこなわれた今年の追悼の日は雨でした。被災されたたくさんの方や震災後に生まれた人たちが各々の思いを持って集まられた公園。追悼の竹灯ろうの多くが雨で点灯出来ない状態でした。寒さの中で、竹灯ろうに傘をさしかけて雨から護っている人、傘もささずに水の溜まったいくつもの竹灯ろうじーっと見ている人、一つの傘の中でお母さんにしがみつこうにしてそんな光景を見ている小さな女の子、合掌をする人、雨空を見上げている人…。色々な人の色々な思いを感じると共に、テレビの前で「うわあ、雨が…」と言うだけで何も出来ない自身の全くの無力さを感じた一月十七日でした。「障りのない人生はありませんよ。」「こうハッキリとおっしゃってくださいました。」「梯 實圓和上でした。」

阿弥陀さまのご法義に遇わさせていただいて“障りをなくす”のではなかったのではありません。 “障りがなくなる” のでもありません。

“障りの多い日暮らし”を親鸞聖人が歩んでくださった阿弥陀さまのご本願のおはたらきに照らされ、護られ支えられながら歩ませていただくのであります。無力な私をそのお徳のすべてをかけて支えてくださっているおはたらきがあるのであります。それが“南無阿弥陀仏”というお念仏さまでありました。あえて“お念仏さま”と申しあげました。

遠藤秀善という山本仏骨和上や 梯 和上のお師匠さまがおられました。この

遠藤和上が晩年に「私はこの頃、“なもあみだぶつ”に“さま”をつけて味わわせてもらっております。“なもあみだぶつさま、なもあみだぶつさま…”」とおっしゃっておられたそうであります。へ私が私の声で、私の口から称えているお念仏であります。その根源に阿弥陀さまの“お前さんどんな事があっても必ず支えてるよ”というおはたらきがあってくださいさっている。そのおはたらきが私の口からお念仏となつて出てくださっている。何があっても私を支えてくださっているおはたらきがある。そんなお心が“なもあみだぶつさま”申させていただいているという遠藤和上のお味わいでありましょう。

さて、先月からご法名のお話しをさせていただいております。

浄土真宗では“戒名”といわずに“法名”と申しあげます。へ阿弥陀さまのご法義の中に日暮らしさせていたただいてる名前」ということであります。

親鸞さまからいただいた願いのこもったお名前（ご本名）と共にご自身で阿弥陀さまの願いの中に生きさせていたただいている”ことを確認する

（ご法名）名告りと申しあげてよいでしょう。

西法寺では今年の六月十七日にご縁の方と共にご本山でご法名をいただく「帰敬式」お受けになりませんかとお誘いを申しあげております。

受式いただくご本山からお経さまや親鸞聖人のお言葉から取られた「釋〇〇」というご法名がその法名の意味を記したものと共にいただけます。

また、（内願）といいますが、ご自分のお名前から一字取られたり、お好きな物や言葉から一字取られたりして「こういうご法名がいたただきたい」と願い出たいただくことも出来ます。親鸞聖人は阿弥陀さまの救いのおはたらきを確認し、新しい心の開けがおりになった時、自ら意識をして二度お名前を変えておられるということを先月お聞かせいただきました。

障りの中の日暮らしを生きる私が、その障りの中の“いのち”を支えてくださっている阿弥陀さまのおはたらきに遇わせていただいていたという、今までの日暮らしを包みこれからの日暮らしに安心をもち「阿弥陀さまのお照らしの中の“いのち”であった」と新しい心の開け確認をさせていただくことの出来る名告りがご法名でありましょう。「帰敬式」お受けになりませんか。合掌

念仏もうさるべし

— 阿弥陀さまと共に生きる —

気がつけば三月であります。有縁皆さまには阿弥陀さまのご本願のおはたらきの中に「なんまんだぶ、なんまんだぶ」とお念仏ご相続のことと思います。

『歎異抄』というお聖教があります。世界中で色んな言葉に翻訳されて読み続けられてお聖教であります。親鸞聖人のお弟子であった唯円房さまという方が親鸞聖人のご往生の後、二十年ほどたつてからお書きくださったと考えられる親鸞聖人のお言葉を中心として編集されているお書物です。

そこには色んな事が説かれてありますが、唯円房さまがごのお書物をお書きくださる元になったお心は「歎き」であります。当時の人々の中には親鸞聖人にお会いしてお念仏を申しながら、自分勝手に教えを解釈して親鸞聖人のおっしゃった事とは違うことをいっていた方がおられたようでもあります。そんな人たちを「覧」になって、へ今、こうして親鸞聖人がお説き残しをくださった阿弥陀さまのご本願のお念仏に遇いながらどうして阿弥陀さまのご本願の大悲のお心を、親鸞聖人のお心を素直に聞かずに自らも安心することなく、そして人々おも惑わして不安にさせてゆくのだらう。〜というお心であります。教えを曲げる人はもちろんいけません、間違った教えに振り回される人にもどうぞ真実の教えに安心してほしいというお心の流れているお書物であります。

さて『歎異抄』の第一条は、

一 阿弥陀の誓願不思議にたすけられまゐらせて、往生をばとぐるなりと信じて

て念仏申さんとおもひたつころのおこるとき、すなはち撰取不捨の利益にあづけしめたまふなり。弥陀の本願には、老少・悪善のひとをえらばれず、

ただ信心を要とすとすべし。そのゆゑは、罪惡深重・煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にまします。しかれば、本願を信ぜんには、他の善も要に

あらず、念仏にまさるべき善なきゆゑに。悪をもおそるべからず、弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なきゆゑにと「云々」。

『一、阿弥陀の誓願の不可思議なはたらきにお救いいただいて、必ず浄土に往生するのであると信じて、念仏を称えようという思いがおこるとき、ただちに

阿弥陀は、その光明の中に撰め取って決して捨てないという利益をお与えくださるのです。阿弥陀の本願は老いも若きも善人も悪人もわけへだてなさいません。ただ、その本願を聞きひらく信心がかなめであると心得なければなりません。なぜなら、深く重い罪を持ち、激しい煩惱をかかえて生きるものを救おうとしておこされた願いだからです。ですから、本願を信じるものには、念仏以外のどんな善もいりません。念仏よりもすぐれた善はないからです。また、どんな悪も恐れることはありません。阿弥陀の本願をさまたげるほどの悪はないからです。

このように聖人は仰せになりました。』と現代語訳をしてくださっています。

阿弥陀さまの「あらゆる「いのち」を必ず覚りの身にしてみせる」という「

本願のおはたらきが私の「いのち」の全体を包み支え育んでくださっていて、そのおはたらきが今私の口から「なんまんだぶ」というお念仏となって出てくださっているのです。私がお念仏をしてその引き替えに阿弥陀さまのお救いが来るのではありません。今、お念仏出来ているということが阿弥陀さまのお救いの真つ只中におらせていただいている、阿弥陀さまと共に生きてくださっている証拠なのであります。お念仏申しているからといって私の上から苦しみや悲しみが劇的になくなるなどということはありません。色々心配にもなるし、寂しい別れにも遭ってゆかねばなりません。しかしその先立たれた方も阿弥陀さまと同じお覚りをお開きくださっている方と仰いでゆく。『そう安心させていただいていいんだ』という証拠がわたしが「なんまんだぶ、なんまんだぶ」とお念仏出来ているということなのであります。お念仏出来ていることは阿弥陀さまと共に生きさせていただいているということです。『しかれば、本願を信ぜんには、

他の善も要にあらず、念仏にまさるべき善なきゆゑに。悪をもおそるべからず、弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なきゆゑに』なのであります。 合掌

世間解

第三六二号

平成三十年 四月

発行 西法寺

念仏もうさるべし

—大悲無倦常照我—

春、四月であります。色々な事が新しく始まる季節であります。また、色々な事が新しく始まる中で私たちは色々な事柄にあり、色々な言葉にあり、色々な場面の中で色々な思いを持ってゆかねばなりません。

楽しいことも、悲しいことも、嬉しいことも、辛いことも、うまくいくことも、どうにもならないことも…本当に色々な事にあつてゆかねばなりません。

その時その時で一生懸命考えて周りの人に助けられたり支えられたりしながら大切に日暮らしをさせていただくのであります。

考えてみれば、私たちは年齢や経験、知識などはまったく関係なく一瞬一瞬まったく新しい時を、もつといえれば未知の時を迎えるのであります。

そんな中で私は、場面場面で色々な事を思ったり考えたりいたします。

正直に申しますと、私は一日のうちで阿弥陀さまのことやご法義のことや、お念仏のことを思っている時間はほんのわずかです。先だった父や母のことなどは朝、お内仏さまのお勤めをさせていただく時に過去帳をめくって父や母の命日に「あつ、今日は月命日か」いうて思い出すくらいのものであります。

お念仏さまにしてもそうです。お衣を着せてもらつて、お同行さまのお家にお参りに寄せていただきましたので、その時は「なんまんだぶ、なんまんだぶ…」とお念仏をご相続させていただきませんが、平生お念仏を度々ご相続させていただいておるかといえは「……すみません」と申しあげるより外ありません。

早い話が、昨年の暮れからこの冬の間「お念仏ご相続した数」と「あつ寒つ」いうた数とどっちが多い？と聞かれたらこれも「……すみません」であります。何時も何時もお聞かせをいただきます。そんな私の日暮らしを一瞬たりとも途切れずに願ひ続け支え続けてくださっているおはたらきがあるのであります。

阿弥陀さまのご本願、そして今阿弥陀さまと全く同じおはたらきとなつてくださっているご往生くださった方々であります。

そのおはたらきの、支えの、願ひの力が私にかかってくたさっている何よりもの証拠が「私が「なんまんだぶ、なんまんだぶ…」とお念仏させていただいてる」ことでもあります。

何時もご拝読をさせていただく「お正信偈」さまに、

極重悪人唯称仏 我亦在彼摄取中 煩惱障眼雖不見 大悲無倦常照我

という一節がございます。へお念仏を申している私は間違いなしに阿弥陀さまのご本願のお心の中に摂め取られている。私の煩惱の眼では阿弥陀さまを直に拝見することは出来ないけれども、阿弥陀さまの大悲のお心は途切れることなく私を照らし護つてくださっているというお言葉であります。

親鸞聖人は、このお心を「ご和讃」にも、

煩惱にまなこさへられて 摄取の光明みざれども 大悲ものうきことなくて つねにわが身をてらすなり

と讃詠されております。へ常照我へつねにわが身をてらすなり」と色んな事において、色んな思いを持ってゆかねばならない私に「常」という

阿弥陀さまのおはたらきがあつてくださるのであります。「常照我身」といふは、「常」はつねにといふ、「照」はてらしたまふといふ。無礙の光明、信心の人をつねにてらしたまふとなり。

つねにてらすといふは、つねにまもりたまふとなり。「我身」は、わが身を大慈大悲ものうきことなくして、つねにまもりたまふとおもへとなり。摄取不捨の御めぐみのこころをあらはしたまふなり。

親鸞聖人のお言葉であります。阿弥陀さまの「お前さん、色んな事はやって来ようけど、必ず支えてるから、間違いなしに覚りの身と生まれるんやと安心してお念仏申しながら生ききつてくるんやで」というご本願のおはたらきは一瞬たりとも私から離れることも途切れることもなく私を育みて続けてくださっておるのであります。

来月もう少し「常」ということについてお聞かせをいただきます。 合掌

世間解

第三六三号

平成三十年 五月

発行 西法寺

念仏もうさるべし

―大悲無倦常照我 その二―

五月になりました。新緑の眩しい季節です。有縁皆さまにはご本願のおはたらしの中、「なんまんだぶ、なんまんだぶ…」とお念仏ご相続のことと存じます。

さて、先月は「常」ということについて少しお聞かせをいただきました。

阿弥陀さまのどんな事があっても私を覚りの身にしてみせるというおはたらきは決して途切れることがないのであります。

前もお聞かせいただきましたように親鸞聖人はこの「常」ということに深い思いを持っておられたのか、お書物の中で度々「解 釈」くださっています。

私の日暮らしは縁にふれて色んな事にあいながら、色んな思いを持ちながらその状 況が、心もちが、コロコロと変わります。

私は、色々な場面や思いの中で心のあり方が一瞬一瞬、怒ったり、笑ったり、嬉しかったり、悲しかったり、イライラしたり、何ともなかつたり…、自分の都合でコロコロと変わってゆきます。しかし、そんな中でも時々にお念仏出来るのは阿弥陀さまのご本願が途切れずにかかり続けて私を包み育ててくださっているからであります。私がお念仏させていたたくのは時々であります。

「恒願一切臨終時 勝縁勝境悉現前」といふは、「恒」はつねにといふ、「願」はねがふといふなり。いまつねにといふは、たえぬころなり、をりにしたがつて、ときどきもねがへといふなり。いまつねにといふは、常の義にはあらず。常といふは、つねなること、ひまなかれといふころなり。

ときとしてたえず、ところとしてへだてずきはぬを常といふなり。

『一念多念文意』というお聖 教に残された親鸞聖人のお言葉であります。

ここで親鸞聖人は「恒」という“つね”と「常」という“つね”の意味を変えて味わっておられます。「恒」と「常」はどちらも“つね”と読む字でありますが、

「同じ“つね”でも意味が違うねんで」とおっしゃるのであります。

「常」の“つね”は先月からお聞かせをいただいている通り“ずーっと”ということであります。へつねなること、ひまなかれといふころなり。ときとしてたえず、ところとしてへだてずきはぬを常といふなり。どの時間、どの場所であっても間断なく続いていることを「常」というとおっしゃるのであります。

まさに阿弥陀さまのご本願のおはたらきであります。

それに対して、「恒」の“つね”は“時々”ということでありましょう。へいまつねにといふは、たえぬころなり、をりにしたがつて、ときどきも「時々」けど継続している”とおっしゃるのであります。これが私の口から出て私の耳に届いてくださるお念仏の相でありましょう。

わたしが「なんまんだぶ、なんまんだぶ…」とお念仏さまをご相続させていたたくのは本当に時々であります。一日のほとんどはお念仏さま以外のことを思い、お念仏さま以外のことをしゃべっているのであります。

しかし、その私が時々「なんまんだぶ、なんまんだぶ…」とお念仏さまをご相続させていたたく…。阿弥陀さまのご本願のおはたらきがあつてくださるからであります。逆に言えば阿弥陀さまのご本願のおはたらきがなければ私はお念仏さまをご相続させていたたく事は決して無いのであります。

日暮らしの、さまざまな縁の中に生きる私の時々のお念仏さまの源にへつねなること、ひまなかれといふころなり。ときとしてたえず、ところとしてへだ

てずきはぬ。阿弥陀さまの「お前さん、どんな事があつても支えているからその“いのち”を臨終という縁まで大事に大事に生ききって、私の浄土に生まれて

くるんだよ」というご本願のおはたらきが途切れずにあつてくださるんやなあと安心させていたたくのであります。「恒」である、時々のお念仏さまは、

「常」なる、決して途切れることのない阿弥陀さまのご本願のおはたらきのあらわれなのであります。お念仏申しておる時だけ阿弥陀さまのおはたらきがかつ

てくださっているのではないのであります。私の日暮らしの一瞬、一瞬何処をとつても途切れることのない阿弥陀さまのおはたらきがかかり続けてくださつてあるから私は時々お念仏申すことが出来ておるのであります。

世間解

第三六四号

平成三十年 六月

発行 西法寺

念仏もうさるべし

澗法雨

梯 實圓和上筆

六月であります。梅雨の季節、しばらくは雨の日とつき合いながらお念仏ご相續させていただくのであります。

あつさりとお天氣がいいですねえ」などと申しますが、これも限度の話でズツとかんかん照りの日が続くと大変なことになりますし、反対にズツと雨が降り続けてもえらいことになるのであります。

太陽（陽の光）と雨（水分）はどちらも私の身体的な“いのち”（気分も含めて）を支え育ててくださる大切な要素であります。

しかし相対的に雨の日は好ましく思われないうです。お天氣なら「エエ天氣やなあ〜」というて空を見上げますが、雨の日には「うわあ、雨か〜」となりますし、今にも降りそうな空模様ですと「降らんといて〜」と思たり言うたりするのであります。

利井明弘先生が、

『…この前、ある村でね、そこは村中の人で村の真ん中にある土地を田んぼや畑にして護っててね、す〜いよ、そろそろ村の中の畑なんか座敷みたい、ゴミ一つおちてない、そこでね「しばらく天気続いてええなあ」言うたらね、「先生、何いうてはりますねん、この時期、毎日、田んぼや畑に水やらアカンのに天氣ばっかり続いて大変ですがな…、この時期に天氣よって喜んでんのは怠けもんだけでっせ!」いわれてね、はずかしかった!』とおっしゃっていたことがありました。

私も「多分にもれずと申しあげてよいかどうか分かりませんが、あまり雨が好きではありません。雨が降りますと何かしら気分が重たくなりますし、今にも降りそうな気配ですとなんやらどんよりした感じになるのであります。先の明弘

先生のお話に照らしますと本当に申し訳ないことでもあります。

お天氣は私の都合に左右されません。一切のものに平等に照り、平等に降りそそぎます。「雨は、毒の草の上にも薬草にもおなじようにふりそそぐんですよ、毒の草と言うけれどもわれわれにとってそうなのであって同じ草を必要としている“いのち”もあるんでしょ〜」とお教えくださったのは梯實圓和上でした。エエ天氣や言うのも、もう一つや言うのも、かなんなあ〜言うのも実はすべて私の都合から出る思い出あります。その意味では、雨一つとっても私の身勝手さをお知らせくださるお育てということかもしれせん。

お経さまには“雨”にまつわるお言葉がしばしば出てまいりますが、雨そのものをあらわす場合と“あめふらす”と読んで教えや仏法を讃える麗しい音楽や花びらがふりそそぐことをあらわす場合があるようです。

お釈迦さまがお生まれになった時九匹の龍が甘露の水を雨ふらせてそのご誕生を讃えたということが言われております。今でもお釈迦さまのお誕生日である“花祭り”にお釈迦さまの誕生仏に甘茶をおかけするのはそれでもあります。さて、お経さまであります、お経さまとはお釈迦さまのお説教でありますから、お覚りを開かれた方のお言葉であります。

『仏説無量壽經』というお経さまに「澗法雨」というお言葉があります。

「法雨をそそぐ」と読ませていただきます。へ〜法義によってあらゆるものを潤してください〜ということでもあります。その部分の現代語訳がこうであります、仏となつたこの菩薩はあちらこちらに足を運び、説法を始める。それはあたかも、太鼓をたたき、法螺貝を吹き、剣を執り、旗を立てて勇ましく進むように、また雷鳴がとどろき、稲妻が走り、雨が降りそそいで草木を潤すように、教えを説き、常に尊い声で世の人々の迷いの夢を覚すのである。

同じ雨を見ても、お覚りをお開きくださったお方がご覧くだされば「雨があらゆるものを平等に潤すように阿弥陀さまのおはたらきはあらゆる“いのち”にかかり続けてお育てくださっているんだなあ〜となるのであります。雨の日に“迷いの夢を覚し”続けてくださっている阿弥陀さまのおはたらきに思

いをいたすことが出来るならば、雨もまた有り難いかなあ〜。なまあみだぶつ

世間解

第三六五号

平成三十年 七月

発行 西法寺

念仏もうさるべし

― お見通しである。 ―

七月であります。ご本願のおはたらきの中お念仏ご相続のことと思ひます。

今年もしつかり半年がすんだのであります。はやいのであります。つい先日お同行さまが「はやいでんなあ、一昨日くらいお正月やと思てたのに」とおっしゃっていました。ほんまにその通りであります。

六月十八日に大きな地震がありました。皆さまにお見舞いを申しあげ、被害のほとんどなかった者として、出来るだけのことをさせていたただかねばならないと思っております。「地震来んといて」とどれほど言っても来るものはやってくる。それが今回ハッキリと分かりました。

「うわっ！来た！」という次の瞬間にどう対応するかを考えておかねばならないということでありましょう。暑さに余震に、皆さま充分にお気をつけくださいませ。さて、これは以前にもお聞かせをいただいたことであつたと思ひますが…、利井明弘先生のお話してあります。

『…、若い時分に友だちと議論したことがあつてね。“冥”という字よ。

ご和讃に「世の盲冥を照らすなり」とあるじゃないですか。あの“冥”ね、普通は“めい”と読むけどここでは“みよう”やね。この字について友だちと議論になったわけですね。友だちはね「冥という字はもともと、薄暗がり、という意味だから、見えるような見えんような、ということや」と言うてね、僕は「何いうてんねん、あれは、見えん、言うことや。大体へ世の盲冥を照らすうのは阿弥陀さまのおはたらきやねんから、見えるような見えんような、なんか中途半端なことあるかい！」といううとつたんですわ。ほんなら向こうは向こうで「いや！字の意味みてみい、冥という字は、薄暗がり、という意味やないか、薄暗がり、やったらどう考えても、見えるような見えんような、という

ことにならんとおかしい。」という言うわけよ。「いやちがう！阿弥陀はんのおはたらきがそんなボーツとしたようなことあるかい！」という議論しとつたんですわ。ほんで結局ね「わしら二人で言いあいしとつたつてしやあない、先生に聞こ」いうことになつたんですわ。ほんで聞きに行つてん。梯先生のところへ。ほんで僕言うてん「先生、“冥”という事で友だちと意見が分かれてんけどどうです？」というて、梯先生に説明したんよ、友だちは「見えるような見えんようないうて言うてるし、僕は「見えん」ということや」というて頑張つてんねんけどどちでつしやる？というて聞いたたらね、梯先生どう思う？ニコニコしながらね「どっちも半分ずつしか的たつてないな」というて言いはつたわ。「半分ずつ何でんねん」というて聞いたたらね「あのな、“冥”というのはな「向こうからは丸見えで、こつちからは全然見えん」ということや」というておしえてくれはつたわ。エエですか、阿弥陀さまの方からはこつち全部お見通しやねん。エエとこだけ見てくださつてるなんか思たら大間違いよ。私のすべてを見通してくださつて、「お前、必ず救てみせるぞ、念仏してこい」というて言うてくださるんです…」

こちらから阿弥陀さまのことを見たり確認したりすることは出来ないけれども、阿弥陀さまは私のすべてをお見通しである。

とても大切なことでもあります。すべてお見通しの方に対して「これでいいでしょうか？」「こんなこととしてはいけませんでしょうか？」などというこちらのほうらいや、心配は全く要らないのであります。

私のすべてを知つておつてくださるんやなと「おまかせ」するだけであります。私が「今、お念仏申すことが出来る」「お念仏が聞こえるところに縁をいただいている」「南無阿弥陀仏ということばをいただいている」という事こそが阿弥陀さまの「お前さん、色んなめにおうて行かねばならないし、色んな思いを持ってゆかねばならないけれども、どんな事がやってきても、どんな事になつてもお前の“いのち”を必ず覚りの身にしてみせることが出来るようになったからどうぞ安心してくれよ、大切な“いのち”をお念仏とともに生ききつてくれよ」というご本願のおはたらきの中におらせていただいていることだと安心させていただくのであります。もう少しお聞かせをいただきます。

世間解

第三六六号

平成三十年 八月

発行 西法寺

念仏もうさるべし

―お見通しである 二―

八月になりました。暑い夏であります。有缘皆さまにはご本願のおはたらきの

中それぞれのご縁でお念仏ご相続のことと存じます。

関西ではお盆の行事が各地でお勤まりになります。

数年前に山本攝観先生にお聞きした、

「盆は嬉しや 別れた人も 晴れてこの世に あいに来る」と

という山本仏骨和尚が八月になると必ずご自坊の山門横の掲示板に書いて貼って

おられたというお歌が本堂に有り難く感じられます。

浄土真宗の公式的な教えでは“先立たれた方は阿弥陀さまのお浄土にご往生く

ださって阿弥陀さまとおなじお覚りを開きくださっているのであるからお盆

のときだけ特別のお帰りになられる方ではないのですよ”ともうしますし、私も

そのようにお取り次ぎをさせていただいております。

しかし、その上で、このお歌をお聴きしてからはもつと豊にお盆のお心を味わ

わせていただけるようになったと思っております。先だつてくださった方々は確か

に阿弥陀さまのお浄土へお生まれくださって阿弥陀さまと一緒に色んな事

にあり、色んな思いを持ってゆかねばならない私を途切れることなく願ひ続け

支え続けてくださる方でありましょうが、お父ちゃんはお父ちゃんのまま、お母

ちゃんはお母ちゃんのまま、おじいちゃんはおじいちゃん、おばあちゃんはお

ばあちゃん、先だつたあの子は先だつたあの子のまま、今の私に会いに来てく

れている…。この頃はそれでいいんだと思うようになっていきます。

お盆の時期、改めてご先祖となつてくださった方々とお話しをしましょう。

阿弥陀さまの事をお尋ねするのもいいですよ。

さて、阿弥陀さま。先月は利井明弘先生と梯和上のお話しを通してへこちらか

ら阿弥陀さまのおはたらきを見ることは出来ないが、阿弥陀さまはすべてお見通

しである。と、このことをお聞かせいただいたのであります。

桐溪順忍和尚はそのことを「私から阿弥陀さまの方へは断絶で、阿弥陀さまから

私の方へは何時も連続してくださっておるんでないかいのお」とおっしゃってお

られました。

そして、このお話しをしてくださるときの利井明弘先生は必ず次のようにお話し

やっておられました。

『：エエですか、全部お見通しでっせ。阿弥陀はんの方からはこちらは全部見え

たあんねん。これねエエとこだけ見てくださってる思たら大きな間違いよ。こな

いしてお寺に参つてお勤めして、お話聞いて：そんなとこだけ見てはる思たらあ

きませんよ。全部見てくださってんねん。私の心の裏の裏までお見通しでっせ。

その上で、よろしいか、全部お見通しでその上で“念仏してこい、必ず救う”い

ておっしゃってる。こつちはアームもないねんて。全部知られてんねんから。

：』すべて知つてくださっている阿弥陀さまには“おまかせ”するだけでよいの

であります。

へお前さん、必ず覚りの身にしてみせるから色んな事はやって来ようけれども

お念仏申しながら生ききつてくれよ」と

という阿弥陀さまのご本願のお言葉とおはたらきおまかせをするのであります。

阿弥陀さまに願われ支えられている方の私どもが、願つてくださっている

阿弥陀さまに向かつて“これで大丈夫でしょうか” “こんな事ではいけませんで

しょうね”などと計らうのではないのであります。

私の心の隅から隅までお見通しで“安心しろ”と阿弥陀さまはおっしゃつてく

ださるのでありますから、私の“いのち”の意味と方向を阿弥陀さまのご本願の

お言葉によつて「私の“いのち”は阿弥陀さまのお浄土にまっすぐ向いてるし、

私はやがて阿弥陀さまと同じお覚りの身とならせていただくんだ」と安心して。

“こんな事では…”と心配したり“これでこれで…”と私の思いや行動を手柄に

したりしないこと。阿弥陀さまがすべてお見通しであるということとは私に

そういう心の世界を開いてくださることなのであります。

世間解

第三六七号

平成三十年 九月

発行 西法寺

念仏もうさるべし

― 追悼 高田慈昭和上 ―

九月です。有縁みなさま方はご本願のおはたらきの中「なんまんだぶ。なんまんだぶ」とお念仏ご相続のことと存じます。

暑い夏でありました。地震や豪雨は各地に大きな被害をもたらしました。

被災を逃れた者として出来ることを出来るだけ続けさせていただくやなあと思ふことでもあります。

八月の二十三日に行信教学校講師・本願寺司教でいらっしやった高田慈昭和上がご往生になりました。行年九十歳。

十三日に少ししんどいというので、ご自身で病院に行かれそのまま検査入院という形で病院におられたそうですが、ご往生になる前日には教校にお電話をされて九月からのご相談くださっていたそうで、突然のご往生に愕然といたしておるのであります。やさしい、ありがたい和上さまでいらっしやいました。

ある時は訥々と、ある時は情熱を込めて、ある時が大変厳しく、そして折に触れてニコツとわらいながらご法義をお語りくださる和上さまでありました。

前住・清観と大変親しくしていただいております、私が産まれる前から



西法寺にはご縁のあった先生で、坊守も教校でお教えいただきましたし、若院・德行は三年間教校の寮におりましたので、和上を最寄りの駅まで送り迎えさせていただくご縁が度々あり、わずかな時間ではありますが、車の中で色々なお育てをいただいたようです。

教校から撰津富田の駅に着きますと「たこ焼き食べるか」とおっしゃって「買って帰ってみんなで食べ」と度々お小遣いをくださったそうでありました。

前住が臨終を迎えた平成三年、和上は開教総長としてブラジルにおられました。父の命日は八月四日ですが、忘れもいたしません九月十三日のお昼頃であったと思います。定例法座の日に突然「星野さん亡くなってんてなあ」と和上がお尋ねをくださいました。

本堂余間の中陰壇の前でお勤めをくださって「長い付き合いでなあ」とおっしゃって「ほんなら京都行かんらんで」とサーツとお戻りになられました。ご本山のご用で帰国されていたわずかな時間をぬってお参りにお越しくくださったのであります。

昭和二十一年か二年とお聞きしたと思うのですが、いずれにしても戦後すぐの行信教校にお入りになり、以来、平成二十六年の五月七日にご往生になられた梯實圓和上とともに行信教校を支え続けてくださった和上さまでありました。

『：戦後の混乱期でね、食べるモノがないから水ばかり呑んで、動いたらお腹すくでしよだから私も梯先生も部屋でジーツとして仏教書やら哲学書やら本ばかり読んでました。しかし、それが良かった。今の私の基礎になつてますわ。リヤカーみたいなん引いて車作りの方まで食べるもんもらいに行ったり薪拾いに行ったりねえ、今では隔世の感がありますねえ。』と教校での会合の折にはよくこんなご挨拶をしてくださっていました。そして、「そんなときに山本仏骨和上が我々に漢詩を作ってくださいなえ」とおっしゃって、

孔々として難に堪え道学厚し 諸生の困苦最も尊しと為す

人間賞せざれども敢えて悔ゆることなく 千載に誠を垂れて仏恩に報ぜん

と、朗々と披露くださったことがありました。その時の梯和上はいつも「そうそう、あんた、よう覚えてるなあ」とおっしゃりながら感極まったお顔で涙をこらえてたことを思い出します。娑婆のならいとはいえ梯和上に続いて、高田和上とお別れさせていただいたかねばならなかった寂しさはなくなりませんが、同時に私の「なんまんだぶ、なんまんだぶ」というお念仏さまの中に高田和上のおはたらきもあってくださるなと温顔とお声を偲ばせていただくのであります。合掌

世間解

第三六八号

平成三十年 十月

発行 西法寺

念仏もうさるべし

— 当相敬愛 —

十月であります。お念仏ご相続のことと存じます。

さて、これはご往生の数年前、梯實圓和上のある結婚式でのご祝辞であります。

『…本日はおめでとうございます。…おめでたいことと申しておりますけれども、

仏教ではもともと僧侶が結婚するということはありませんでした。出家をいたしましたと家を捨て、家族を捨てて文字通り裸一貫になって修行にいそむというのが僧侶の生き方でした。従って女性であれ男性であれ結婚するということとはしなかつたのでございます。それを僧侶でありながら結婚をし

家庭を営む、そういう世俗の生活の中で、しかし、出家の道を生き続ける。そういった生き方というものを新しく開いてくださった方が実は浄土真宗の宗祖、親鸞聖人だったわけでございます。

当時、隠れて結婚していた僧侶もいましたが、堂々と奥さんと子どもさんたちと一緒に生活をしながら、しかもそれを仏道として高めていった。そういう方が親鸞聖人というお方でした。私たちはその流れを汲みまして、そしてこうして結婚もし家庭を持ち、その意味では世俗の生活をしておる。しかし生活は世俗だけれども、やはり世俗を超えたそういう領域を目指して生きていく。そういった生き方というものをね、それを実際に生活の中で実践し、また人びとにそれをお勧めになつていらつしやる。そういった方が親鸞聖人であり、それから今日まで八百年、浄土真宗の僧侶は結婚し、そして家庭生活を送りながらその中で仏さまの救いというものを確認していく。そういう生き方をするようになりました。

そういう中ですね、やはり一番大切なことは「敬愛をする」ということですね。“敬”は、うやまう、ということ。“愛”は、あいする、ということですが「敬愛する」というのは『仏説無量寿経』というお経の中に出てくる言葉です。

「当相敬愛 無有憎嫉」とあります。まさにあい敬愛して、そして憎しみや嫉妬、ねたみの心を制御しながらお互いに敬いの心と深い相手への思いやりの心をもって生きようとする。そういうところに仏道としての人生があるんだ。

ということがお経の中にいわれているんですね。ですから親鸞聖人もご結婚をされて世間の人たちから、おそらく嘲笑されたりあるいは非難攻撃されたりする事もございましたけれども、その中で営々として、やはり、夫婦というのは人倫の一番根本である、と昔からいわれておりますけれども、人は一人だけで生きるものではない。必ず関係性の中で生きている、その関係性の中で一番基本的な単位になるのが夫婦でございましょう。

そういう中で人間の温かい関係、つながりというものが生まれてくる。そういう中で仏さまの救いというものを確認していく。そういう仏道というモノがなければならぬ。またそれを実践された方が親鸞聖人というお方だったのですね。今申しました、その根本にあるのが「敬愛」ということとございましょう。

仏さまのお言葉にしたがって生きていこうとする。

“敬”というのは相手に対する、うやまい、の心ですね。お互いに世俗の生活の中ですべてをさらけ出しながら生きていくのが夫婦でございまして。外の世界には見せない顔も夫婦なら見せていく、そして赤裸々な人としての生き方を

していくわけでございますが、その中で尚且つ相手に対する敬いの心というものを持つ、それは“いのち”への敬いであり、“いのち”への畏れであるという思いを持ちながら相手の本当のしあわせを心から願ってゆく。

“愛する”ということは自分のために人を愛するんじゃないで、相手の幸せ、なんかお役に立つこと、相手の人生に何かお役に立つことがあればそうさしていただくたいと、そういう願いを持って行きていく。相手を本当に大切な者として、大切な“いのち”として見つめていくというそういう眼差しというものを生涯忘れてはならないと思えます。色んな事が起こる、決して生易しいことでは

ございません。しかし、何が起こつてこようとそこに見忘れてはならないことがある。それが慈悲の心であり敬愛の心です。新しい人生の門出一言申しあげ

させていただきます。』

合掌

合掌

合掌

合掌

合掌

合掌

合掌

合掌

合掌

世間解

第三六九号

平成三十年 十一月

発行 西法寺

念仏もうさるべし

―有り難い―

十一月であります。本年もあと二ヶ月となりました。有縁皆さまにはご本願のおはたらきの中に「なんまんだぶ、なんまんだぶ」とお念仏ご相続のことと存じます。

十月十四日に若院・徳行が大阪の津村別院ご本堂において美緒さんと挙式させていただきました。

数えきれない方々のお育てとご恩の賜とあらためてお礼申しあげますとともに、今後も何かとご厄介になることと思いますが、ご鞭撻のほど何卒よろしくお願いいたします。天岸浄圓先生が以前よく結婚式のスピーチで、

「…、今までお互いに環境の違う、価値観の違う中で育ってきたお二人が、不思議のご縁でこうして夫婦となる。これから様々なことが起こってきましよう。お二人だけならまだしもお二人の周りの中からも思いもかけないことが起こってくるかもしれません。そんなときに「何でこんな事に…」と考えないで、へこれであたりまえなんやな」と、そしてたまさか平穏な日暮らしが続くことがあつたらそれをへ有り難いことだな」と慶んでいけるような家庭を築いてほしいと思ひます。「よくこうおっしゃってました。

家庭生活だけではありません。今後色々な事にあつてゆかねばならないでしょうが、今年六月の地震に加えて何度も台風襲われ、その都度被災をされた方々がたくさん出られるという、近年にない荒れた年であるように思ひます。「自然は我々に多くの恵みをもたらしてくれますが、ひとたび荒れ狂うと大きな被害を巻き起こします。我々は全く太刀打ちできませんねえ。」とおっしゃった浅井成海先生のお言葉を思い出します。

九月四日の台風二十一号は大阪を直撃いたしました。お昼間でしたが、三時間

近く暴風が吹き荒れました。

台風の最中に寺に居たのは坊守さんと私とこなっただけでした。

西法寺の庫裏が建つたのは五十年以上前で、阪神淡路大震災や六月の地震

もぐり抜けた建物で、今回も無事に建つてくれておりますが、さすがにあの

暴風の最中は庫裏全体がガタガタと音を立てて揺れておりました。大げさではな

く「次の風で屋根が飛んでゆくかもしれない」と思ひました。

怖くなって、坊守さんと、こなつと、私はご本堂横の集会所に避難をしておつた

のであります。遠くからピューと風の音が聞こえてやがて庫裏がガタガタと音を

立てて揺れているのが分かりました。

まさに非日常の体験でありました。「常」ではなかったものであります。

暴風が吹いている間の私の心もちは「大丈夫かなあ、はよ台風いってくれへ

んかなあ」「いざとなつたらトナイして逃げたらエエのかなあ」等という思ひば

かりで、正直申しあげてその間には「なんまんだぶ」も「阿弥陀さま」もすつか

りどこかに飛んでいってしまったりました。

我々は何事もなく平穏な日暮らしが「日常」であり、思ひがけないことや

自然災害などが起きるとそれを「非日常」と考えるのであります。

しかし、日暮らしの様々な「縁」の中では何が起こるか分かりませんし、何が起

こつてもおかしくないのであります。その意味では私の「いのち」は「何が起こ

つてくるか分からない常」の中に生かされているのであります。

親鸞聖人は「常」についてこうおっしゃるのであります、

常といふは、つねなること、ひまなかれといふころなり。ときとしてたえ

ず、ところとしてへだてずきはぬを常といふなり。

これは阿弥陀さまが私を照らし続け支え続けてくださる事をおっしゃるのであり

ます。阿弥陀さまのおはたらきに非常はないのであります。

苦しいこと、悲しいことはやってこない方がいいし、やってきたときは大変だ

けれども、どんな事が私の上によつてきても、阿弥陀さまや「往生」生くたさつた

方々は何時も一緒に居つてくださる。何事も無い平穏な日暮らしが実はとても

有り難いことであると改めて知らせていただいたような頃ころであります。合掌

世間解

第三七〇号

平成三十年 十二月

発行 西法寺

念仏もうさるべし

一つつみきつてくださっている一

十二月、歳の暮れであります。有縁みなさま方にはご本願のおはたらきの中

「なんまんだぶ、なんまんだぶ…」とお念仏ご相続のことと存じます。

本年も何かとお世話になりました。誠に有りがとうございました。

大阪の浄土真宗本願寺派寺院の住職は、毎年十一月の十一日から十六日まで

勤修されます大阪本町にある本願寺津村別院の報恩講さまに数年に一度でありま

すが出勤させていたたく縁が巡ってまいります。

今年私は私がその縁をいただきまして、最終日の十一月十六日に津村別院の

お内陣にあらせていただきました。

津村別院の報恩講さまは毎年十五、十六の二日間、ご門主さまと前門さまが

一年交代でお導師をなさってくださいまして、本年は大谷光真前ご門主さまがお

出ましをくださいました。間近で前門さまのお勤めにあわせていただき

大変ありがたい縁でありました。

お勤めに引き続いて前門さまのご法話を聴聞させていただきました。

「恩徳讃」のお言葉によられながら一言一言大変ご丁寧にご法話くださいました。

その中で「阿弥陀さまの救いは決してその時だけ、その場限りという一時的なも

のではありません」というお言葉がありました。改めて有りがたいなあとお聞か

せをいただいたのであります。

私はこの『世間解』で何時も「阿弥陀さまのお救いのおはたらきは途切れるこ

とがありません」というようなことをお聞かせいただいておりますが、そのおは

たらきを客観的ではなくご自身が照らされている立場からおっしゃってください

たお言葉であるいただきました。

何か事が起こって、それが解決したりなるとかあったりすると私は

「ああ、よかった」「阿弥陀さん支えてくれてはったなあ」等と思うのでありま

すが、何事も無い時はなんとも思はないのであります。前門さまは「阿弥陀さま

は私が困っている時だけ支えてくださるのではありません。楽しい時も、何とも

ない時もそのおはたらきは変わりません。」というようなことをおっしゃって

くださったのであります。

思い返せば今年色々な事がありました。大阪では先ず六月の地震、八月から

九月にかけての台風…。日本各地で色々な災害に見舞われた年であったように思

います。辛いことだけではなく、西法寺には十月に慶ばしい事もございました。

十四日に若院・徳行と美緒さんの挙式を津村別院でお勤めさせていただきました。

とても有りがたいことでした。そんな中、今も書きながら思い起こすのでありま

すが、「六月の地震の前はどんなんやったかなあ」と思うのであります。

特別な事がない限り「いつものこと」で流れていってしまったことに改め

て気づかされるのであります。

“日々の日暮らしのことを何から何まで覚えなければならぬ”と申しあげて

いるのではありません。これもよくお聞かせをいただきますが「なんか一週間く

らい“あつ”という間やったなあ」ということが言えている状態は何事もなか

ったことの裏返しでありましょう。

先の前門さまのお言葉は「阿弥陀さまの私を救いきってみせる」というおはた

らきはどんなときの私も包みきつてくださっているということでありましょう。

『才市よい うれしいか 有りがたいか 有りがたいときや 有りがたい なつ

ともないときや なつともない 才市 なつともないときや どぎあすりや どが

あもしよをがないよ なむあみだぶと どんぐりへんぐりしているよ 今日も来

る日も やーい やーい』 妙好人・浅原才市さんのお歌であります。くるしい

なあ うれしいなあ たまらんなあ たのしいなあ かなんなあ よかったなあ

…。色んな思いが有りますように私の日暮らしの大半は有りがたいことに“何と

もないとも思わん”時間がしめていっているのではないのでしょうか。

その私の“いのち”の何処をとっても阿弥陀さまのご本願のおはたらきは私を

包みきつてくださっておるのであります。

なまあみだぶつ